

佐久市埋蔵文化財調査報告書第26集

HUJIZUKAKOHUNGUN・HUJIZUKA NI  
藤塚古墳群・藤塚II

長野県佐久市大字塚原・常田藤塚古墳群・  
藤塚遺跡II発掘調査報告書

1994. 3

与志本林業株式会社  
佐久市教育委員会

佐久市埋蔵文化財調査報告書第26集

HUJIZUKAKOHUNGUN・HUJIZUKA NI  
藤塚古墳群・藤塚II

長野県佐久市大字大字塚原・常田藤塚古墳群・  
藤塚遺跡II発掘調査報告書

1994. 3

与志本林業株式会社  
佐久市教育委員会



1. 藤塚 4 号墳航空写真 (協同測量社撮影)



2. 藤塚 4 号墳航空写真 (協同測量社撮影)

## 例 言

- 1 本書は平成3年度国庫補助金により試掘調査、古墳主体部確認調査を実施し、与志本林業株式会社が行う工場建設のため、平成3・4年度発掘調査、平成5年度報告書作成事業を行った、藤塚古墳群・藤塚遺跡Ⅱの発掘調査報告書である。
- 2 調査委託者 東京都中央区日本橋三丁目3番9号  
与志本林業株式会社 代表取締役 青柳繁夫
- 3 調査受託者 長野県佐久市大字中込3, 056  
佐久市教育委員会 教 育 長 大井季夫
- 4 発掘調査所在地籍及び面積  
藤塚古墳群・藤塚遺跡Ⅱ (TFZⅡ) 19,033㎡  
長野県佐久市大字塚原字藤塚1551-2、1545-1~5、1577-4、1549-3、1574-4  
大字常田字吾津多利599-1~4、600-1、601-1、602-1、605-1・3、606-1、604、  
606-3、607-1、608-1、610-2、614-2、623-1、624、626-1
- 5 調査期間  
平成3年10月2日~12月20日・平成4年1月20日~3月21日  
平成4年4月4日~9月16日・9月17日~10月7日  
平成5年4月3日~平成6年3月
- 6 本書の付編については以下の各位より玉稿を賜った。厚く御礼申し上げる。  
付編1 佐久市藤塚古墳群出土人骨について 森本岩太郎  
付編2 長野県佐久市藤塚古墳群出土の人骨 宮崎重雄
- 7 石質の鑑定を岡部静氏にお願いした。
- 8 本書の執筆は第Ⅱ章第1節遺跡周辺の地形・地質を樋口和雄氏が、他は高村が行った。
- 9 本書及び出土遺物等の全資料は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

発掘調査及び報告書作成に際しては、次の方々にご指導・ご助言・ご協力を賜った。ここにご芳名を記して厚く御礼申し上げます。

岩崎卓也・大塚初重・森島稔・臼田武正・土屋積・宇賀神誠司・児玉卓文

# 目 次

巻頭カラー図版

例言・目次

第I章 発掘調査の経緯	1
第1節 発掘調査に至る動機	1
第2節 調査体制	3
第3節 調査日誌	4
第II章 遺跡の概観	5
第1節 遺跡周辺の地形・地質	5
第2節 周辺遺跡の状況	6
第3節 基本土層	8
第III章 遺構・遺物	10
第1節 検出遺構・遺物	10
第2節 藤塚古墳群	10
(1) 4号墳	10
(2) 7号墳	17
(3) 8号墳	22
(4) 9号墳	28
第3節 竪穴住居址	34
(1) 第1号住居址	34
(2) 第2号住居址	35
(3) 第3号住居址	37
第4節 竪穴状遺構	38
(1) 第1号竪穴状遺構	38
(2) 第2号竪穴状遺構	39
第5節 土 坑	41
(1) 第1号土坑	41
(2) 第2号土坑	42
第6節 その他	42

付編1 佐久市藤塚古墳群出土人骨について

付編2 長野県佐久市藤塚古墳群出土の人骨

## 挿 図 目 次

第1図 藤塚古墳群・藤塚遺跡II 位置図(1:50,000)……………2	第27図 第1号住居址実測図……………32
第2図 藤塚古墳群分布図(1:5,000)…7	第28図 第1号住居址炉址実測図……………33
第3図 E区基本土層模式図……………9	第29図 第1号住居址出土遺物(1)石器…33
第4図 Aa区基本土層模式図……………9	第30図 第1号住居址出土遺物(2)土器…33
第5図 4号墳土層断面図……………11	第31図 第2号住居址実測図……………34
第6図 4号墳試掘トレンチ設定図……………13	第32図 第2号住居址炉址実測図……………35
第7図 甕棺1実測図……………14	第33図 第2号住居址出土遺物実測図(土器)…35
第8図 甕棺1出土土器実測図……………14	第34図 第3号住居址実測図……………36
第9図 4号墳出土遺物実測図(1)土器……………15	第35図 第3号住居址出土遺物実測図(1)土器……………37
第10図 4号墳出土遺物実測図(2)玉類・剣…16	第36図 第3号住居址出土遺物実測図(2)鉄器……………37
第11図 4号墳出土遺物実測図(3)石器…17	第37図 第1号堅穴状遺構実測図……………38
第12図 第1号集石遺構実測図……………17	第38図 第2号堅穴状遺構実測図……………39
第13図 第2号集石遺構実測図……………17	第39図 第2号堅穴状遺構出土遺物実測図……………39
第14図 7号墳実測図……………18	第40図 第1号土坑実測図……………40
第15図 7号墳主体部実測図……………19	第41図 第2号土坑実測図……………40
第16図 7号墳石室実測図……………20	第42図 その他の出土遺物実測図(土器)…41
第17図 7号墳出土遺物実測図(1)金属器…21	第43図 第2号特殊遺構人骨出土状態実測図…41
第18図 7号墳出土遺物実測図(2)金属器…22	付図1 調査対象地の地形と区設定図 (浅間エンジニアリング作成)
第19図 8号墳実測図……………23	付図2 藤塚古墳群・藤塚遺跡II遺構全体図
第20図 8号墳主体部実測図……………25	付図3 調査前の4号墳地形測量図 (浅間エンジニアリング作成)
第21図 8号墳出土遺物実測図(1)金属器…26	付図4 調査後の4号墳地形測量図 (株式会社協同測量社作成)
第22図 8号墳出土遺物実測図(2)玉類…27	付図5 4号墳遺物分布図
第23図 7~9号墳出土遺物実測図(土器)…27	
第24図 9号墳出土遺物実測図(金属器)…28	
第25図 9号墳、礫群実測図……………29	
第26図 2号墳概略図……………31	

# 第 I 章 発掘調査の経緯

## 第 1 節 発掘調査に至る動機

藤塚遺跡は佐久市大字塚原・常田に所在し、標高670m付近を測る台地上に位置する。遺跡の西方約750m先には北流する千曲川が流れており、南方には根岸の山々の中に存在する佐久地方で初めて発見された前方後円墳である薮の峯古墳群が望める。藤塚遺跡が存在する塚原付近の地形・地質は基盤である洪積層・湯川層の上部に、黒斑山（浅間山の第1外輪山）のカルデラ爆発によって噴出した多量の火山砂・溶岩片や既存の岩片が一時に流下した塚原岩屑流（泥流ともいう）が覆っており、その末端部にあたっている。厚さ3～5m、東側は湯川の線、西側は近津付近、南縁はほぼ千曲川におよぶ不等辺三角形の地域に分布し、北上部は小海線で、その後の新しい浅間火山の噴出物、追分火山灰流に覆われている。

藤塚遺跡内では、昭和62年度に佐久埋蔵文化財調査センターが行った新町工場用地進入路新設工事に伴う試掘調査を行ったが、土師器片が一片出土したのみで、遺構の検出はみられなかった。

今回、与志本林業株式会社による資材置き場・加工場建設、第一次開発地域内には藤塚2・4号墳が存在する（藤塚2号墳は石室もしっかりしていることから、緑地として保存することとなる）。これらの古墳の存在から付近にはまだ古墳の存在する可能性がたかく、国庫補助金により試掘調査を実施した。

その結果、藤塚4号墳の南方に方形の高まりが確認され、地形測量を実施した結果、佐久地方では初めての前方後円墳となる可能性が生じてきた。そこで、文化庁の指示により藤塚4号墳の主体部の調査を国庫補助金により実施したが、耕作により削平されてしまったのか確認できなかった。また、2号墳の西側に耕作の際削平されたと思われる古墳が2ないし3基存在することが明かとなった。

以上のことから、開発が行われる前に発掘調査を実施し記録保存することとなった。



第1图 藤塚古墳群・藤塚遺跡II位置图 (1 : 50,000)



## 第2節 調査体制

平成3年度

(事務)

教 育 長	大井季夫	教 育 次 長	奥原秀雄
埋蔵文化財課長	上原正秀	管 理 係 長	桜井牧子
埋蔵文化財係長	草間芳行		
埋 蔵 文 化 財 係	高村博文・林幸彦・三石宗一・須藤隆司・小林眞寿・羽毛田卓也・竹原学		

(調査)

担当者	高村博文
調査員	井上行雄・山崎平八郎・荒井ふみ子・金沢花子・香山優子・小林立江・小林まさ子・高橋ふみ・樋田咲枝・柳沢ちなみ・柳沢典子

平成4年度

(事務)

教 育 長	大井季夫	教 育 次 長	奥原秀雄
埋蔵文化財課長	上原正秀	管 理 係 長	桜井牧子
埋蔵文化財係長	草間芳行		
埋 蔵 文 化 財 係	高村博文・林幸彦・三石宗一・須藤隆司・小林眞寿・羽毛田卓也		

(調査)

担当者	高村博文
調査員	山崎平八郎・荒井ふみ子・飯森れい子・池田豊子・今井みさ子・勝山克世・神津よしの・小須田サクエ・小林立江・小林まさ子・小林よしみ・清水佐知子・高橋ふみ・樋田咲枝・成沢富子・花里きしの・花里八重子・堀籠みさと・桃井もとめ・柳沢ちなみ

平成5年度

(事務)

教 育 長	大井季夫	教 育 次 長	奥原秀雄
埋蔵文化財課長	上原正秀	管 理 係 長	小林泰子

埋蔵文化財係長 草間芳行

埋蔵文化財係 高村博文・林幸彦・三石宗一・須藤隆司・小林眞寿・羽毛田卓也・  
富沢一明・上原学

(調査)

担当者 高村博文

調査員 今井みさ子・荒井ふみ子・小林立江

### 第3節 調査日誌

平成3年度

10月2日(休)本日より、藤塚4号墳の周辺部であるB・D・Ab・E区の発掘調査を開始する。

10月2日(休)～10月14日(月) B・D区内の2基の竪穴状遺構を調査する。

10月9日(休)～10月28日(月) Ab区の調査を実施する

10月26日(土) 航空写真撮影

10月28日(月)～12月20日(金) E区の藤塚7・8・9号墳の調査を実施する。

11月21日(休) ラジコンヘリコプターによる航空写真撮影

平成4年1月20日(月)～3月21日(土) 室内整理作業

平成4年度

4月4日(土)～4月18日(土) 室内整理作業

4月13日(月)～9月14日(火) 藤塚4号墳の調査を実施する。

9月14日(火) 筑波大学岩崎卓也教授現地視察。ラジコンヘリコプターによる航空写真、航空測量実施。

9月16日(木) 機材・テントの撤収を行い、現場でのすべての作業を終了する。

9月17日(金)～10月7日(金) 藤塚4号墳の盛り土の水洗い及び検査

平成5年度

4月3日(土)～平成6年3月 報告書作成

## 第II章 遺跡の概観

### 第1節 遺跡周辺の地形・地質

佐久市付近の地質図を見ると、東側には第三紀の荒船火山を含む関東山地に連なる山々がある。西側の千曲川左岸は、第三紀の小諸層群の上を八ヶ岳火山岩類が覆い御牧原に連なっている。この間に広がる佐久平は、滑津川より北では第一軽石流と塚原泥流が分布している。御代田町馬瀬口から小諸市森山を結ぶ線から北では第二軽石流があらわれる。佐久平北部で特徴的な田切地形は、第一、第二軽石流の分布域に限られており、ほぼ、北東から南西の方向に刻まれている。北東方向の追分原に田切地形が見られないのは、おもに1108年の噴出による追分火砕流によって田切が埋めつくされたからである。岩村田の住吉町から長土呂にかけて、また、長土呂の西・常田の北の辺りでは田切地形が消滅しているのは、ここより南は、いわゆる「塚原泥流」の分布域で第一軽石流が及んでいないからである。塚原泥流、第一軽石流、第二軽石流、追分火砕流はいずれも浅間火山の崩壊物質と噴出物であり、この順に新しくなる。

塚原泥流堆積物は岩村田の西方から千曲川までの間の約10平方キロメートルに分布している。発掘調査地点は塚原泥流の西の端に近く、流山の最西端である。「塚原泥流」の語感には多量の水の存在を連想させるが、実態は黒斑成層火山の東側で発生した大規模な水蒸気爆発により崩壊した山体の堆積物であり、乾いて冷たい「岩屑流」であった。ここには、高さ数メートルから十数メートルの「流れ山」が数多く見られるのが特徴で、塚原、平塚、赤岩などの地名は、いずれもこの地形によるものである。後述するように、ここは岩屑流の末端近くで周辺に比べて高かったのである。

現在みられる「流れ山」の地形は、凹凸の大きかった堆積物の表面を新しい沖積堆積物が覆ったために最も高い突起部だけが小丘として残ったものである。「流れ山」はその分布域の東側のものは比較的小さく、幾つかは圓場整備で姿を消してしまっている。西側の常田周辺では大きなものが多く、居住として利用されているものも多い。「流れ山」の形成された年代、すなわち、黒斑山が比高500メートルに及ぶ山体崩壊に見舞われたのは炭素14法による測定で約22,500年前のことである。これは4つの試料について京都産業大学で行われた測定値の平均で、中佐都小学校出土のそれは23,400±300 B、Pであった。試料の採取地点は根々井の湯川右岸、三河田の滑津川右岸と中佐都小学校の地下である。

塚原泥流堆積物の厚さは中佐都小学校で約20メートルである。小学校建設にともなうボーリング・コアが保管されており、地下19.5メートル以深には当時の地表面が姿を表わす。当時の地表面は多くの有機質を含み高層湿原の様相を呈していたようにみえる。このサンプルを野沢北高等学校生物クラブが花粉分析を行ったが、それによると、ハンノキ・カンバ・モミ・ツガ属の花粉の他にマツ・イネ科の花粉も検出されている。当時がヴェルム最終氷期の最寒冷期に近かったことをこれ等の花粉も裏づけている。現在の気候では標高1500メートルぐらいに相当するように見える。20メートルの深さにはAT（始良テフラ：約22,000年前の鹿児島湾最北部起源の火山灰）が確認できる。

「塚原泥流」の西側を除く北・東・南側には約13,600年前噴出の第一軽石流が分布している。この時の噴火で多量の火山灰が成層層まで吹き上げられ、上空の偏西風によって北関東の広い範囲に板鼻黄色軽石層（YP）を堆積させた。上空まで上昇しきれずに塗口から火口付近に落下した多量の火山灰と軽石は、自から発するガスとの混合物となって高速の火砕流となり佐久平を完全に埋めつくした。第一軽石流は厚いところは30メートルに達するが、これによって千曲川が堰とめられて大きな湖が出現したことは湯川と滑津川の河岸で水成層として認めることができる。

第一軽石流が塚原泥流を避けた理由は次のとおりである。塚原泥流はその先端近くに小高い堆積丘を残した。その後の第一軽石流は地表の凹凸を埋め、なだらかな現在見られるような地表面を作った。長土呂地籍の北の深井戸では地下25メートルまでが第一軽石流でその下に34メートルの厚さの塚原泥流が存在する。これは塚原泥流の堆積丘の周囲を厚さ25メートルの第一軽石流が埋めて平滑化されたことを意味するのである。

発掘調査地点は比高約8メートルの「流れ山」である。流れ山のなかには、その頃に溶結した凝灰角礫岩をのせたものもあり、断面も巨大な岩塊を含むものから、巨礫を含むもの、ほとんど火山砂だけのものまでである。これ等はいずれも黒凝成層火山が崩壊したものである。今回の調査用トレンチに現れた「流れ山」は地表から0.5～1.0メートルの厚さの褐色をした第一軽石流に覆われていた。その下はスコリアと火山砂で、やや赤味を帯びた黒色を呈している。含まれる岩塊は黒色の火山礫が多く、白い軽石も認められるが、いずれもあまり大きくはない。小數ながら異質の礫も認められるが、これらはいずれも溶結していないし、赤色酸化もしていないので、この「流れ山」が冷たい岩屑流、または、粉体流によって形成されたことが分かる。

## 第2節 周辺遺跡の状況

藤塚古墳群・藤塚遺跡IIが存在する大字常田・塚原地籍は佐久市北部の西方に当たる。小海線



第2図 藤塚古墳群分布図 (1:5,000)

の岩村田駅を発して小諸駅に向かうと、まず、中佐都駅がある。この付近が佐久平北部の稲作地帯であり近世に中佐都田圃として開拓された水田が一带に続いている。

この水田地帯には、大小100余個以上に及ぶ半球状、島状の残丘があり、この地域は基盤である洪積層、湯川層の上部に黒斑成層火山（浅間山の第一外輪山）の東側で発生した大規模な水蒸気爆発により噴出した多量の火山砂・溶岩片、既存の岩片が一時に流下した塚原泥流が覆っており、その末端部に当たっている。

そして、塚原泥流により形成された大小の残丘を利用して構築された古墳が存在している。昭和50年度に調査した家地頭第一号墳の発掘調査当時には14基の古墳がこの一帯に確認されている。昭和56年度下大豆塚1・2号古墳の発掘調査時点では一基増し15基が確認されている。昭和57・58年度に実施した佐久市詳細分布調査では藤塚古墳群で6基、姫小石古墳群で2基、家地頭古墳群で5基、大豆塚古墳群で3基、下大豆塚古墳群で2基、東池下古墳群で4基、鷺林古墳群で5基の27基が確認されている。このようにこの地域には数多くの古墳が築造されており、横根古墳群とともに佐久市でも有数な奥津城である。また、今回の発掘調査で3基の新発見の古墳が確認されたように耕作等により消滅してしまった古墳が数多くあることが明らかとなった。

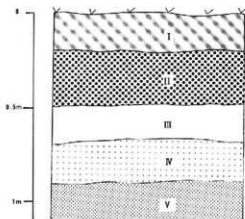
岩村田・長土呂地籍の長土呂・芝宮遺跡群をはじめとしていくつかの大遺跡群の存在は聖原遺跡の発掘調査によって明らかになってきたように大規模な集落址が存在することを裏づけており、これらの地域と塚原・常田を中心とする古墳群との有機的な結びつきを今後、模索していく必要がある。

### 第3節 基本土層

発掘調査対象地の土層は、第II章第1節遺跡周辺の地形・地質で述べられたように、基本的には浅間火山の崩壊物と噴出物である塚原泥流とその上を覆う第一軽石流（P1）の組合わせである。

ここでは、Aa区とE区の基本土層模式図を呈示して、これら区の土層について概略的に記述したい。

E区は調査対象地の東南部に当たる傾斜地である。ここからは7～9号墳の横穴石室と考えられる古墳があらたに発見された。図に呈示した基本土層はE区の下部にあたる。E区の上では耕作土を取り除くと第一軽石流（P1）がみられるが、下部に行くにしたがい傾斜地特有の堆積状態にみられる黒色土が厚くなっていく。E区の下部の土層はI～III層まで約70cmの厚さで耕作土があり、その下にIV層の暗褐色土が20cm堆積し、その下にV層の黒褐色土となる。E区の下部では約1m下でも第一軽石流（P1）が認められなかった。



- I層 10YR3/2(黒褐色土層)表土。  
 II層 10YR2/3(黒褐色土層)耕作土。  
 III層 10YR2/3(黒褐色土層)II層より色調がやや暗い耕作土。  
 IV層 10YR3/3(暗褐色土層)黄色ロームブロック、多量を含む。  
 V層 10YR2/2(黒褐色土層)小礫を含む、粘性ややあり。

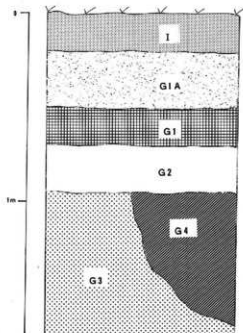
第3図 E区基本土層模式図

古墳の周溝などの遺構は耕作土を取り除くと検出できた。

A a 区は調査対象地のほぼ中央に位置し、塚原泥流により形成された大きな流れ山となっている。A a 区からは4号墳が検出されている。

この流れ山に土層確認トレンチを入れて土層を観察したものが第4図である。それによると、表土が20cmほどあり、その下部は0.5~1mの厚さでG1A・G1・G2層がみられる。G1A・G1・G2層は細かく見ると分層できるものの基本的には第一軽石流(P1)の土層と考えられる。その下部は緑灰色のG3層と黒色のG4層がみられ、いずれも砂礫層であり、塚原泥流の層と考えられる。

4号墳は塚原泥流により形成された流れ山を削りながら形を整え、若干の盛り土を加えて成形した跡が窺える。



- I層 10YR4/4(褐色土層)表土。  
 G1A層 10YR5/4(よい黄褐色土層)粘性なし、小礫を多量を含む。ちみつでない。  
 G1層 10YR5/6(黄褐色土層)ちみつ、礫を含む(P1層)  
 G2層 2.5Y3/4(黄褐色土層)黒色砂粒を多量を含む。砂質。  
 G3層 10G6/1(緑灰色土層)砂礫層。  
 G4層 10G2/1(黒色土層)砂礫層。

第4図 A a区基本土層模式図

## 第三章 遺構・遺物

### 第1節 検出遺構・遺物

#### (1) 検出遺構

古墳	4基(4・7・8・9号墳)
住居址	3棟(古墳時代前期)
竪穴状遺構	2棟
土坑	2基
溝状遺構	2基
特殊遺構	2基

#### (2) 出土遺物

土器	縄文時代、古墳時代前期・後期、奈良・平安時代
金属器	直刀・刀子・鉄鏃・鉄斧・鉸具・蛇尾金具・耳飾り
玉類	ガラス小玉・管玉・切子玉・丸玉
石器	石鏃・打製石斧・砥石

### 第2節 藤塚古墳群

#### (1) 4号墳(第5～11図、付図3～5、図版三～七)

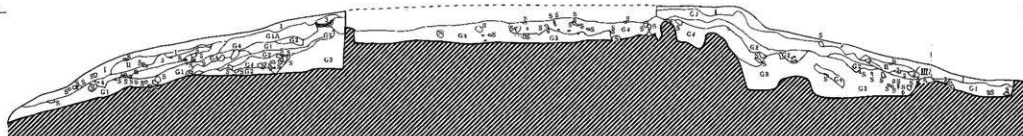
4号墳は調査対象地のほぼ中央Aa区に位置する。当初、藤塚4号墳として円墳が周知されていたが、桃の木を伐採して前方が開けたところ、円墳の前方にもわずかな高まりが存在し、あるいは前方後円墳になるのではないかと期待し、地形測量・試掘調査・主体部確認調査と国庫補助金を使用して実施した。

地形測量(付図3)によると、くびれ部が長くなり、いわゆる、定型化した前方後円墳ではなく四国に存在する鶴尾神社4号墳と同形の形をとることがわかった。また、試掘調査によって出



A

A' 678.69



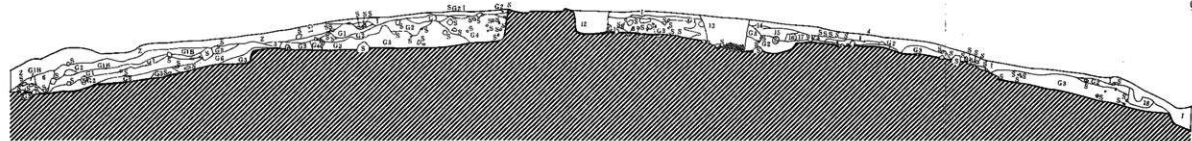
B

B' 679.09

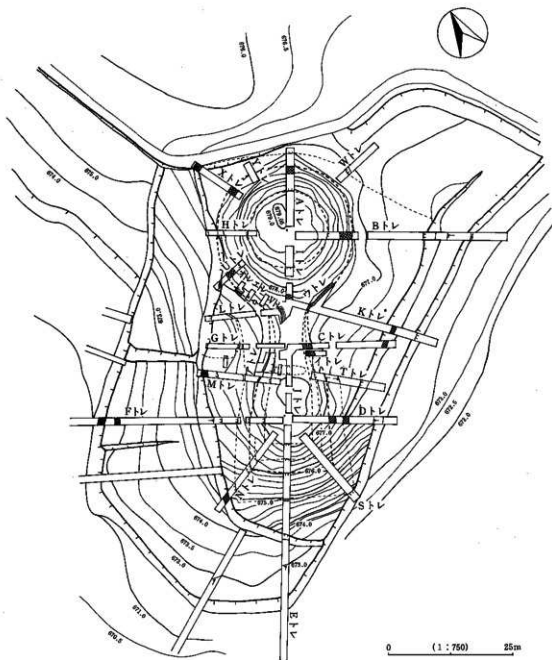


- |     |                                   |      |   |
|-----|-----------------------------------|------|---|
| 1層  | 10YR4/4(褐色土層)表土。                  | 10層  | 10YR3/3(黒褐色土層)3層より粒子が粗く、やや硬い。                 |
| 11層 | 10YR3/4(暗褐色土層)表土。                 | 11層  | 褐色アロックとロームアロックの混入土。                           |
| 12層 | 10YR4/2(にじみ状褐色土層)黒色砂粒を含む。         | 12層  | G1とG3の粒子が主体(KD11の覆土)                          |
| 13層 | 10YR6/4(にじみ状黄褐色土層)表土。             | 13層  | G1とG3の粒子が主体で下部に5-10cm程度の塊がまじりつまっている。(KD18の覆土) |
| 14層 | 10YR4/1(黒褐色土層)表土。5cm-10cm程度の塊を含む。 | 14層  | 10YR6/6(明黄褐色土)ローム粒子主体。                        |
| 15層 | 10YR3/3(黒褐色土層)粘性なし、小礫を含む。         | 15層  | 7.5YR4/6(褐色土層)粘性なし。                           |
| 16層 | 15層と同様であるが、色調が明い。                 | 16層  | 3層と似るが、やや暗い。                                  |
| 17層 | ロームアロックと黒色アロックの混入土。               | 17層  | 3層と似ているがやや明るい。                                |
| 18層 | 10YR4/4(褐色土層)粘性なし、小礫、ローム粒子を含む。    | 18層  | 7.5YR4/4(褐色土層)粘性なし、小礫を多量を含む。                  |
| 19層 | 7.5YR4/4(褐色土層)表土。                 | G1A層 | 10YR3/4(にじみ状黄褐色土層)粘性なし、小礫を多量を含む。              |
| 2層  | 10YR5/6(黄褐色土層)やや硬い。かきやすい。         | G1B層 | G1の腐砕層。                                       |
| 3層  | 10YR3/3(黒褐色土層)小礫を含む。              | G1C層 | G1の腐砕層。                                       |
| 4層  | 10YR3/3(黒褐色土層)粘性なし、小礫を含む。(腐砕土の覆土) | G1D層 | 10YR2/8(黄褐色土層)ちみつ、礫を含む(F1層)                   |
| 5層  | 10YR2/1(黒褐色土層)粘性なし、ちみつ(腐砕土の覆土)    | G2層  | 2.5YR2/4(黄褐色土層)黒色砂粒多量を含む、砂質。                  |
| 6層  | 10YR4/2(にじみ状褐色土層)粘性なし、小礫を多量を含む。   | G3層  | 10G4/1(緑褐色土層)砂礫層。                             |
| 7層  | 7.5YR4/2(黄褐色土層)粘性なし、小礫を含む。        | G4層  | 10G2/1(緑褐色土層)砂礫層。                             |
| 8層  | 10YR4/4(褐色土層)粘性なし、3層よりやや明るい。      | G5層  | 10YR6/4(にじみ状黄褐色土層)砂礫層。                        |
| 9層  | ローム層と黒色土層の混入土。                    | G6層  | G1、G3の混入土。                                    |
| 9層  | 10YR4/4(褐色土層)粘性なし、小礫を含む。          |      |   |

C 677.46



第5図 4号墳土層断面図

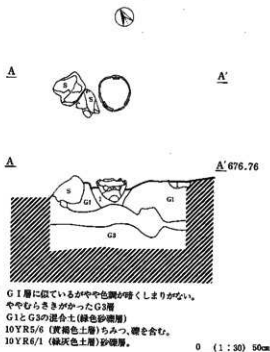


第6図 4号墳試掘トレンチ設定図

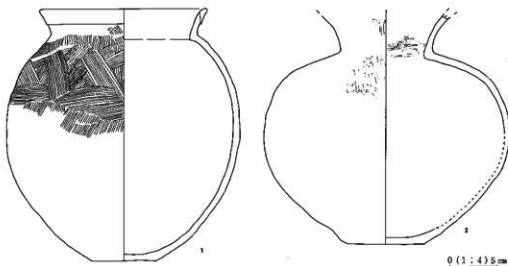
土する土器は古墳時代前期のものがほとんどで、前方後円墳の期待を大きく抱かせた。しかし、主体部確認調査では、地山まで掘り下げても検出できず現在まで主体部が残っていないことが明らかとなった。

4号墳は長さ約90m、幅約60mの軸方位が北は浅間山に、南は立科山に向かう塚原泥流により形成された「流れ山」を利用してつくられている。古墳の全体の成形は削りだしによるものと考えられるが、その後、黒色土を利用した盛り土部分も見られる。

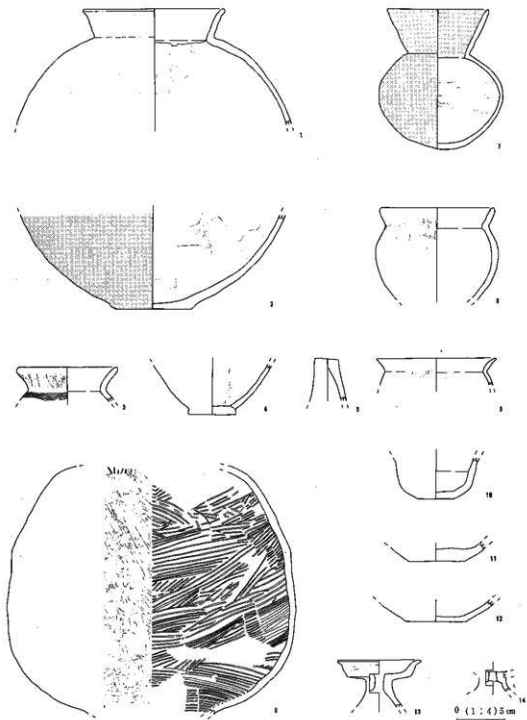
円墳には北方向1/4部分に幅約1m50cm、深さ約10~20cmの周溝をもつが他の部分にはみられない。ただ、西側約1/4にみられる溝は、あるい



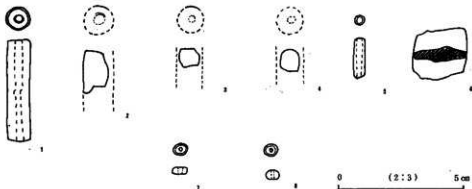
第7図 甕棺1実測図



第8図 甕棺1出土土器実測図



第9图 4号填出土遗物实测图(1)土器



第10図 4号墳出土遺物実測図(2) 玉類・剣

は、第1・2号溝状遺構と同質のものとも考えられる。

円墳の規模は直径約25mの正円に近く、高さは現状で約1m50cm程であるが、当時の高さは1m～2mぐらい高かったものが、耕作等により削平され現在に至っているものと見られる。

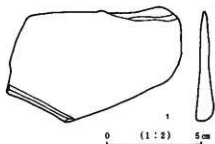
円墳の南側には、平安時代と考えられる第2号特殊遺構が存在し、円墳を破壊している。

前方部には方形周溝墓的な溝が、き-23・24グリッドから始まり、直角に曲がって、す-28グリッドで終わる。規模は東西長約15m、南北長約12m、深さは約10～20cmのものである。また、前方部には桃の植樹の際、掘った土坑が数多く規則的に検出されている。方形周溝墓の主体部も確認できなかった。

前方部にもう一つの溝が、き-20グリッドからえ-28グリッドにかけて小規模ながら存在し、この溝のあり方から、あるいは前方後円形をする古墳となる可能性がある。

前方部の、お-28グリッドからは貼り付け口縁の甕と球胴状の壺のほぼ完形品が出土しており、特に甕(8-1)は正位に埋置された状態で出土している。これは、この古墳と関係がある甕棺ではないかと考えられる。

円墳の出土遺物としては、墳土を水洗い検査したところ、ガラス小玉2点(10-7・8)、管玉4点(10-2～5)が出土し、その他、剣と考えられる鉄製品も出土している。これら、玉類と剣の出土からこの円墳の主体部に副葬された遺物と考えることができ、主体部が確実に存在し



第11図 4号墳出土遺物実測図  
(3) 石器



第12図 第1号集石遺構実測図



第13図 第2号集石遺構実測図

たが耕作等で削平されてしまったと考える根拠になるものである。

管玉は輝緑凝灰岩製のもので、円墳から出土した太玉4点(10-2~5)はいずれも故意に破砕されていた。前方部で出土した輝緑凝灰岩製の管玉(10-1)は完形で出土している。そのほか、泥岩製の砥石(11-1)が円墳の、こ-8グリッドより出土している。

土器の出土位置については、付図5、4号墳遺物分布図を参照いただきたい。

そのほか、集石遺構が2基検出された。第2号集石遺構は第1号住居址の床面上に検出され、時期的にみて4号墳と同時代の可能性はあるものの、その性格については不明である。

## (2) 7号墳(第14~18図、図版八~十一)

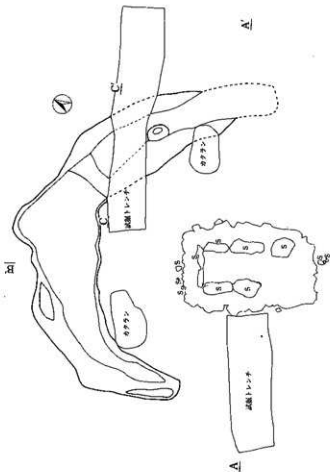
7号墳は調査対象地の南東側E区に位置し、E区で検出された3基の古墳のうちもっとも東側に存在する。

古墳のマウンドはすでになく、横穴石室の石室下半分が残っていた。古墳の規模については、北側半分に周溝が検出され、およそ11~12mの円墳だったと推定できる。

石室は長方形石室で羨道部との区切りがはっきりせず、入り口部から約1m50cm奥に区切りを付けたと考えられる石がおかれている。

奥壁から残存する羨道部までの現存長は4m、玄室部長2m40cm、奥壁幅1m40cm、支門部幅

673.54  
B



C 673.04



A

A



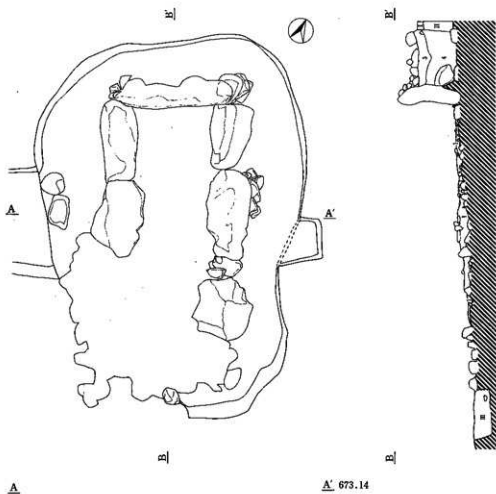
A-A'・B-B' 土層説明

- 1層 10YR2/2(黒色土層)小遺ロームを含む。
- 2層 10YR2/2(黒色土層)粘板やあり、小遺を含む。
- 3層 10YR2/2(黒色土層)小遺ロームアゾウを含む。土層2層より厚し、粘板やあり。
- 4層 10YR2/1(棕色土層)ローム層で、粘板やあり。
- 5層 10YR2/1(棕色土層)粘板色の子を含む。粘板やあり。

- C-C' 土層説明
- 1層 10YR2/2(黒色土層)粘板を含む。粘板あり。
  - 2層 10YR2/2(黒色土層)粘板やあり、粘板や多く含む。
  - 3層 10YR2/1(棕色土層)小遺を含む。粘板やあり。
  - 4層 10YR2/1(棕色土層)小遺を含む。粘板やあり。
  - 5層 10YR2/1(棕色土層)粘板色の子を含む。粘板やあり。

0 (1 : 100) 2 m

第14図 7号墳実測図

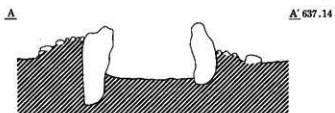
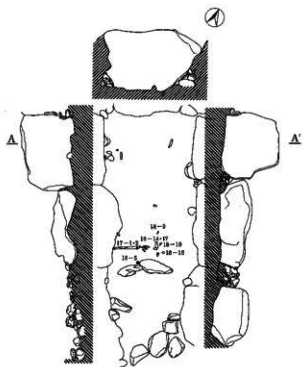


- I 層 10YR2/2(黒褐色土層)小礫、ロームブロックを含む。
- II 層 10YR2/1(黒色土層)ローム粒子、黒色粒子を含む。粘性ややあり。
- III 層 10YR1.7/1(黒色土層)茶褐色粒子を含む。粘性ややあり。
- 1 層 10YR3/4(暗褐色土層)サラサラしている。小礫を含む。
- 2 層 10YR2/2(黒褐色土層)粘性ややあり、小礫を含む。
- 3 層 10YR2/2(黒褐色土層)小礫、ロームブロックを含む、I層よりしまりなし。
- 4 層 10YR2/1(黒色土層)ローム粒子、粘性ややあり。

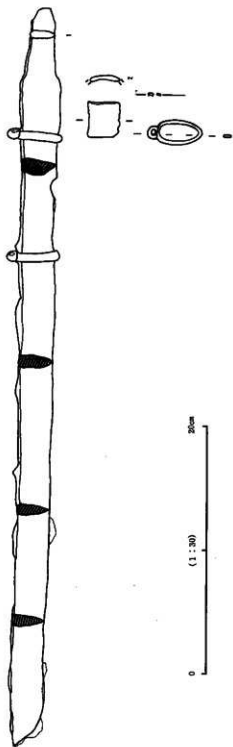
0 (1:60) 2m

第15図 7号墳主体部実測図

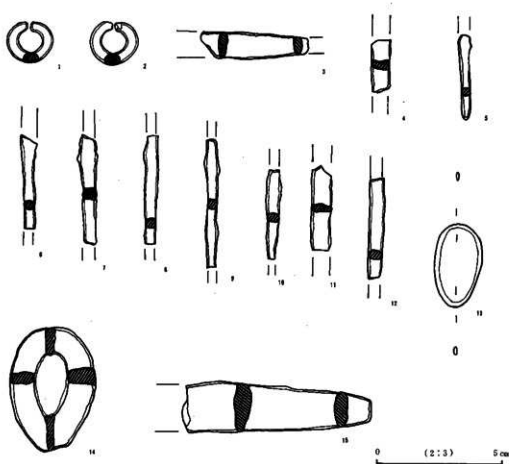




第16图 7号墳石室実測図



第17图 7号墳出土遺物実測図(1) 金属器



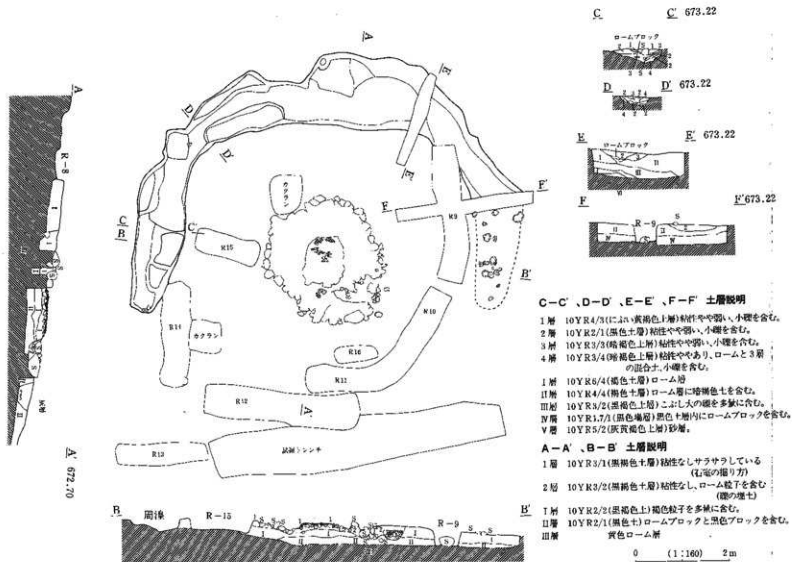
第18図 7号墳出土遺物実測図(2) 金属器

1 m30cmを測り、石室プランの長軸方向はN-26°-Wを示す。

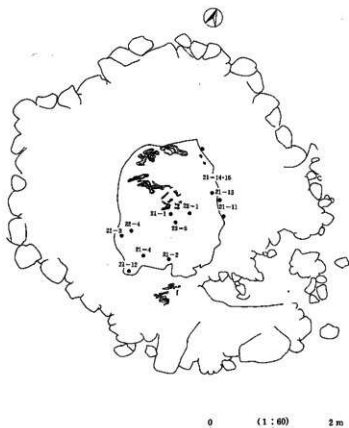
出土遺物は、既に数次にわたる破壊・盗掘をうけているためか遺物の出土量は少なく、また、埋葬当時の位置を保つ遺物はないと考えている。遺物の大半は玄室部から出土したものである。玄室内からは直刀2点、金環2点、刀子1点、鉄鏃9点などが出土しているが、金環は今まで佐久市内の古墳から出土した金環の大きさに比べ二回り小さい。

### (3) 8号墳 (第19~23図、図版十二~十四)

8号墳は調査対象地の南東側E区に位置する。E区は塚原泥流によって形成された「流れ山」の南斜面にあたり、ここから3基の横穴石室の古墳が検出された。8号墳は7号墳の西隣りでE



第19図 8号墳平面図



第20図 8号墳主体部実測図

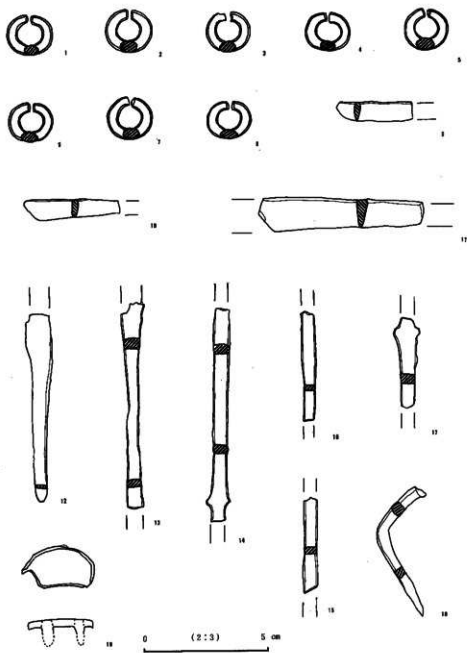
区のはば中央に位置する。

古墳のマウンドは耕作等により削平されており、石室も残っていないかった。ただ、わずかに主体部の礎床が検出された。また、古墳の規模については、北側半分より検出された周溝によって、ある程度推測できる。

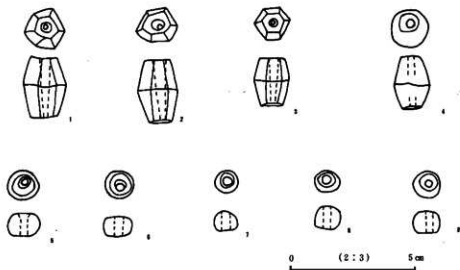
周溝の幅は広いところで1 m 50 cm、狭いところで50 cm、円形というより方形に回っている感じで、あるいはこの8号墳は方墳だったかもしれない。古墳の規模は、周溝の内側で12~13 m前後と考えられる。

主体部は奥壁、側壁、羨道部の石がまったく無く、棺床である部分に $\phi$ 1~2 cm大の河原石が敷かれており、主体部と確認できた。残存する主体部の規模は、長軸約2 m、短軸約1 m 60 cm、長軸方向N-30°-Wを示す。

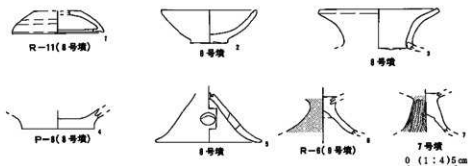
墳丘の墳土にどうも礫が使っていたらしく、周溝とダブルのように大きな溝状の土坑をほり、R-8~16までの礫をつめこんだ礫群が検出され、この古墳を破壊する際、耕作者が古墳に使われていた石を土中に



第21图 8号出土遺物実測図(1) 金属器



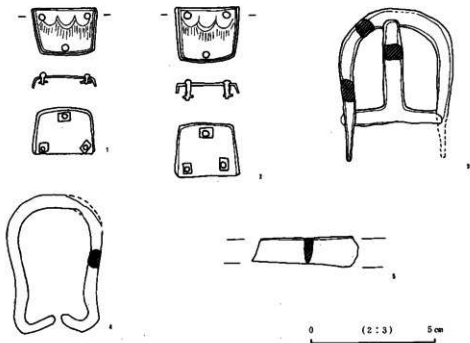
第22図 8号墳出土遺物実測図(2) 玉類



第23図 7～9号墳出土遺物実測図(土器)

埋めた跡が残っている。

出土遺物はほとんどが棺床に残っていた主体部からで、金環 8 点 (21-1-8)、刀子 2 点 (21-8・9) 鉄鏃 6 点 (21-12-17)、角釘 1 点 (21-18)、蛇尾金具 1 点 (21-19) 水晶製の切子玉 3 点 (22-1-3)、黒曜石製の切子玉 1 点 (22-4)、ひすい製の丸玉 2 点 (22-5・6)、チャート製の丸玉 3 点 (22-7-9) などが出土している。また、須恵器の返りのある蓋 (23-1) が 1 点、R-11 より出土している。



第24図 9号墳出土遺物実測図（金属器）

#### （4）9号墳（第24・25図、図版十五）

9号墳は調査対象地の南東側E区に位置する。E区は塚原泥流によって形成された「流れ山」の南斜面にあたり、ここから3基の横穴石室の古墳が検出されている。9号墳は8号墳の西隣りでE区の西端にあたる。

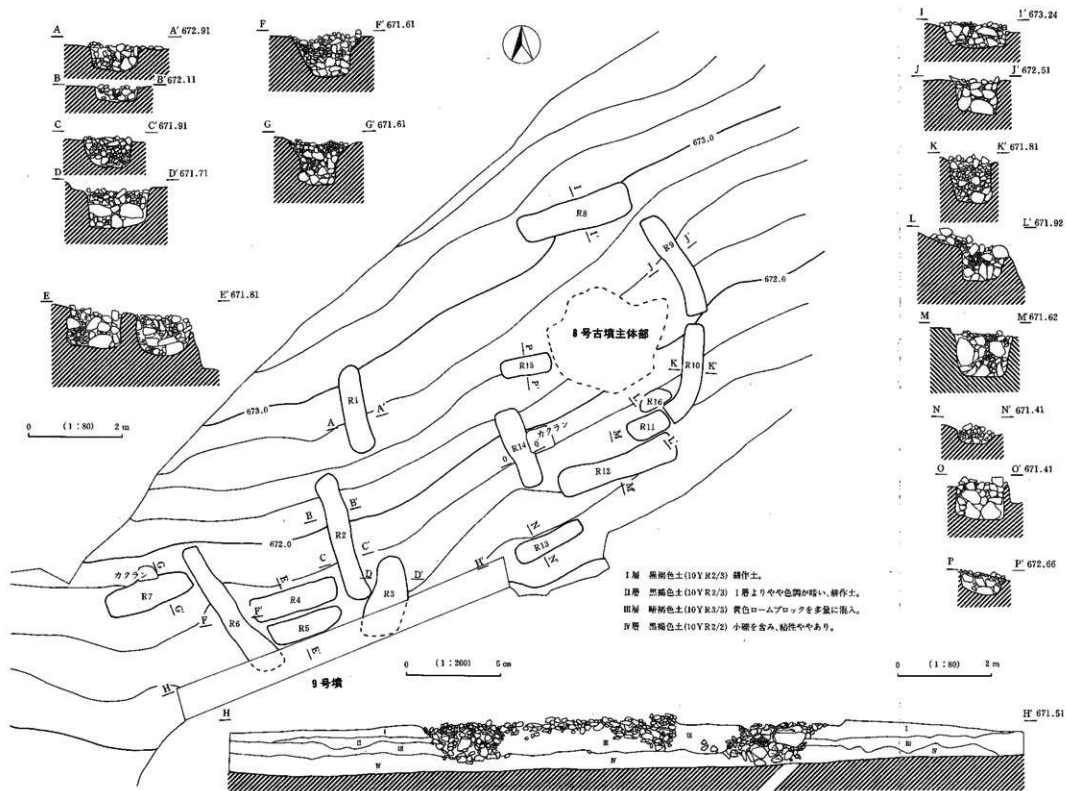
古墳としてのあつかいは主体部も周溝も検出されておらず、8号墳と同様、墳土とおもわれる礫を、穴を掘って埋められた礫群がR1～R7まで検出されているにすぎない。

この礫群の存在と礫群内から出土する遺物と7・8・9号墳の地形的環境から9号墳としたが、あるいは、古墳はなかったかもしれない。

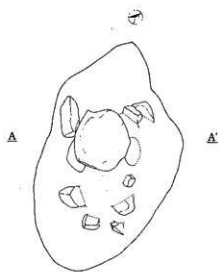
出土遺物には、刀子1点（24-5）、鉸具2点（24-3・4）、東一本柳古墳出土のものと同じ蛇尾金具2点（24-1・2）が出土している。

2号墳は7号墳の東側に石室を露出して存在する。この古墳は与志本林業株式会社の好意に



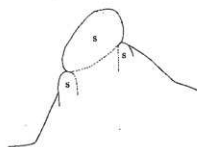


第25図 9号墳、礎群実測図



A

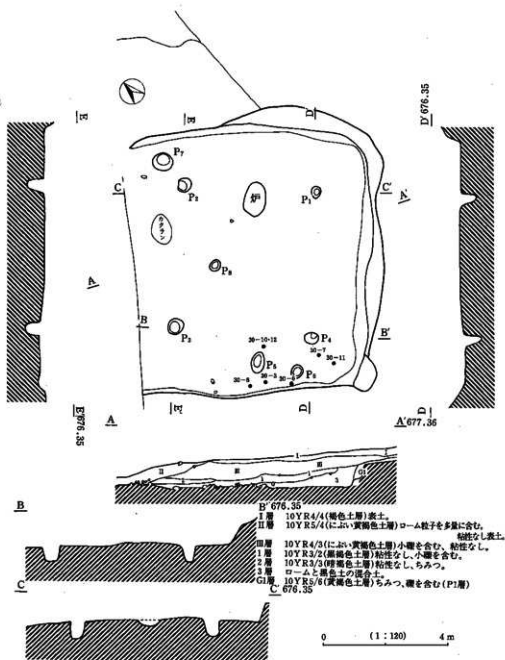
A' 676.82



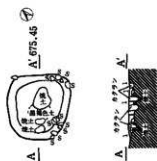
0 (1 : 80) 1 m

第26図 2号墳概略図

よって、緑地として保存されることとなった。2号墳を観察すると墳土につかわれているのは、土ではなく拳大から頭大の大きさの礫であった。



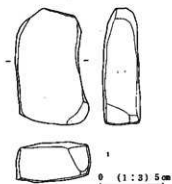
第27図 第1号住居址実測図



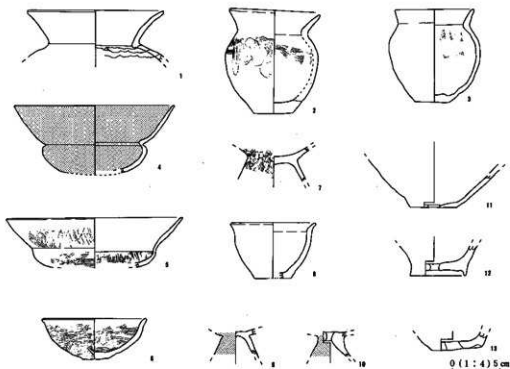
1層 10YR4/3(におい黄褐色土層)  
黒色土がローム層と混合して  
堆積したものであろう。

0 (1:60) 50cm

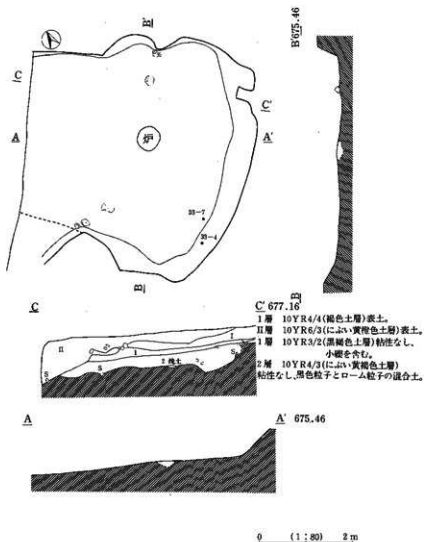
第28図 第1号住居址炉址実測図



第29図 第1号住居址出土遺物  
実測図(1)石器



第30図 第1号住居址出土遺物実測図(2)土器



第31図 第2号住居址実測図

### 第3節 竪穴住居址

#### (1) 第1号住居址 (第27~30図、図版十七・十八)

第1号住居址はA a区西側、Z~お-17~22グリッド内より検出された。他遺構との重複関係はないものの、第2号集石遺構が住居址の中央床面上より検出されている。

覆土の堆積状況は第2号住居址と同様であり、3層のロームと黒色土の混合土の上に自然堆積と考えられる1層の黒褐色土が堆積している。

西壁はすでになく検出されなかった。規模は北壁長740cm、東壁長720cm、南壁長630cmのほぼ方形となり、かなり大型の住居址である。主軸方位はN-33°-Eを測る。

付属施設として支柱穴と考えられる4本の柱が4隅に配置されており、北壁側の2本の支柱穴間に地床炉が存在する。

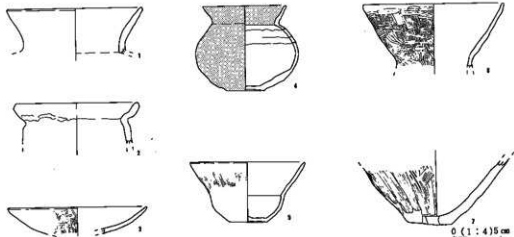


A 55 55 A' 675.46

1層 5YR4/6(赤褐色土)G1が加熱を受けて赤色化したと思われる焼土層。あまりけんちよでない。  
G層 7.5YR5/4(よい質褐色土)G1とG2の混合土。砂質。

0 (1:60) 50cm

第32図 第2号住居址炉址実測図

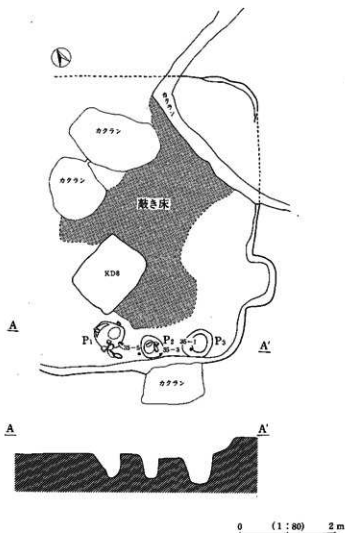


第33図 第2号住居址出土遺物実測図(土器)

出土遺物は南壁側に集中し、壺、鉢、小形甕、坏、高坏、器台、甌などが出土している。30-2・3などの小形甕は弥生時代後期に出土するものに類似するが櫛描き文がみられずヘケメ調整である。30-7はS状口縁甕の台部と思われる。

## (2) 第2号住居址(第31~33図、図版十八・十九)

第2号住居址はAa区の西側、Z-う-25~27グリッド内より検出された。他遺構との重複関係はないものの西壁はすでになく検出されなかった。

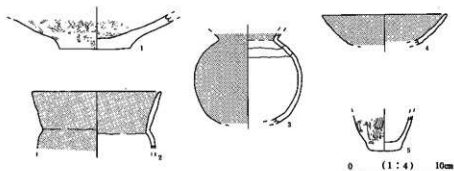


第34図 第3号住居址実測図

覆土の堆積状態は第1号住居址と同様で、2層の黒色粒子とローム粒子の混合土の上に自然堆積と考えられる1層の黒褐色土がのっている。

規模は南北長450cm、東西長450cmの変形したほぼ方形の住居址となる。主軸方位は $N-30^{\circ}-E$ を測る。

付属施設としては、柱穴は検出されなかった。浅く掘りくぼめた地床炉が住居址床面の中央付近より検出された。



第35図 第3号住居址出土遺物実測図(1)土器

出土遺物は東壁の南側より多く出土し、甕、小形壺、埴、高坏、甗などが出土している。33-4の小形壺は赤色塗彩されているものの胴部が球胴状を呈し、弥生時代後期より新しい様相がうかがえる。

### (3) 第3号住居址(第34~36図、図版十九)

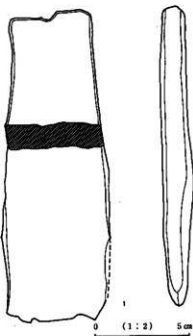
第3号住居址はAα区中央、4号墳のくびれ部に当たる、き~こー19~22グリッド内より検出された。他遺構との重複関係はないものの、畑境いの溝、ぶどう畑のつるの引っ張りの土坑、KD34などにより破壊を受けていた。検出されたのは南壁と東壁の一部、北東隅だけで全容は明かではない。

覆土は地山である第一軽石流(P1)と似た黄色ロームに近く、若干暗い色調を呈していたにすぎない。この覆土は埋め戻された可能性が高い。

規模は確認できる範囲で、南北長590cmではほぼ方形の住居址になると考えられる。主軸方位はN-25°-Eを測る。

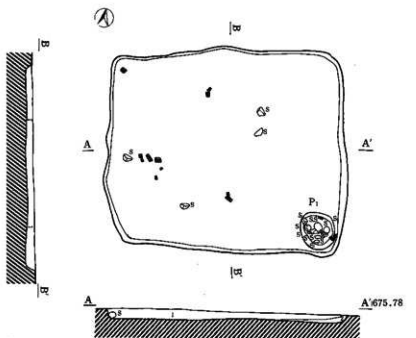
付属施設としては、南壁側に3個のピットが検出され入り口の施設と考えられる。また、住居址の中央付近スタクリートンの範囲で固く敷きしまった葎き床が検出されている。

出土遺物は、南壁の攪乱のなかから鉄斧が出土しており、他の遺物の多くは南壁近くから出土している。土器には壺、埴、高坏、ミニチュア品などが出土している。



第36図 第3号住居址出土遺物実測図(2)鉄器





- 1層 10YR2/2(黒褐色土層)粘性やや強し、炭化粒子少量、  
ローム粒子少量含む。
- 2層 10YR(暗褐色土層)粘性やや強し、炭化粒子少量、  
ローム粒子多量含む。

0 (1:60) 2 m

第37図 第1号堅穴状遺構実測図

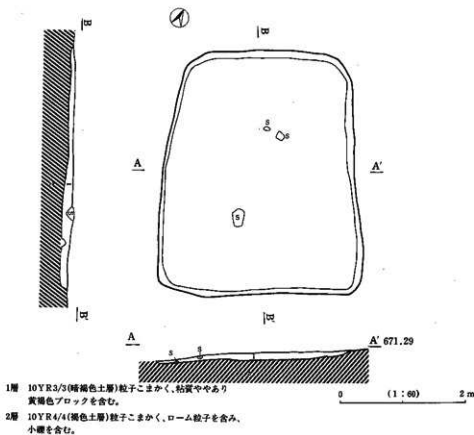
## 第4節 堅穴状遺構

### (1) 第1号堅穴状遺構 (第37図、図版二十)

第1号堅穴状遺構は調査対象地の北側B区に位置する。付属施設としての炉あるいは竈が存在しないため堅穴状遺構とした。

規模は東西約380cm、南北約330cm、壁高12~15cmの東西にやや長い方形を呈する。床面はおおむね平坦で炭化物が存在した。堅穴状遺構の東南隅にピットが1基検出された。

出土遺物は土師器小片が散点出土したにすぎない。



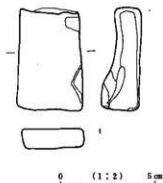
第38図 第2号堅穴状遺構実測図

(2) 第2号堅穴状遺構(第38・39図、図版二十一)

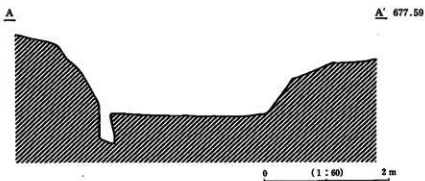
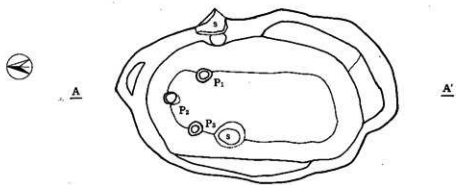
第2号堅穴状遺構は調査対象地の西側D区において検出された。第1号堅穴状遺構と同様、扉あるいは竈がないため堅穴状遺構とした。

規模は東西約310cm、南北約390cm、壁高5~20cmの南側にやや広がる台形を呈している。床面は西、南にやや傾斜をもちあまり平坦ではなかった。そのほか、ピット等の付属施設は検出されなかった。

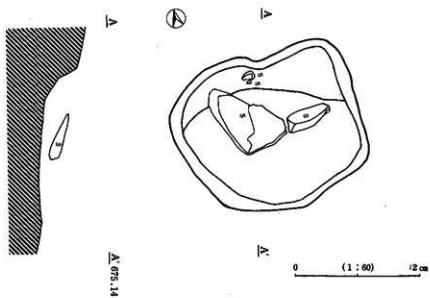
出土遺物としては土器器小片が2点と砥石が出土している。



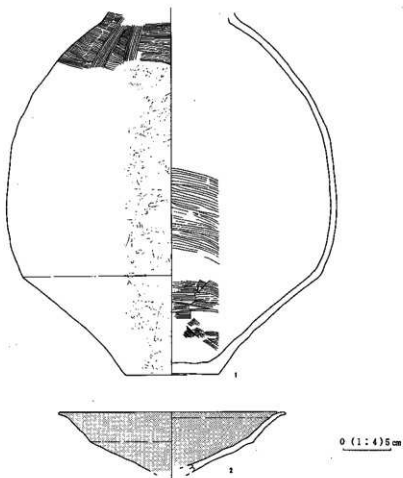
第39図 第2号堅穴状遺構出土遺物実測図(石器)



第40图 第1号土坑实测图



第41图 第2号土坑实测图



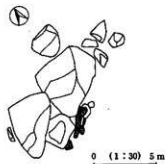
第42図 その他の出土遺物実測図（土器）

## 第5節 土 坑

### （1）第1号土坑（第40図、図版二十二）

第1号土坑は4号墳が存在するAa区、せ・そ-19~21グリッド内より検出された。

規模は長軸約450cm、短軸約270cm、深さ約140cmの楕円形を呈する。



第43図 第2号特殊遺構人骨出土状態実測図

出土遺物として縄文土器が出土していることから落とし穴かもしれない。

## (2) 第2号土坑(第41図、図版二十三)

第2号土坑は第1号土坑と同じく、4号墳が存在するAa区、し・す-35・36グリッド内より検出された。

規模は約350cmの不整形を呈する。出土遺物としては土師器小片が1片出土したにすぎない。

## 第6節 その他

その他、本遺跡からは、第1号特殊遺構がAa区、せ~つ-30~35グリッド内より、第2号特殊遺構がAa区、き~こ-16~18グリッド内より検出されており、本遺構からは人骨が出土している。

その他の出土遺物としては寛永通宝、石鏃、打製石斧などが出土している。また、42-1は武掘トレンチBのE区面より、42-2はAb区西南斜面より出土している。

## 付編 1 佐久市藤塚古墳群出土人骨について

聖マリアンナ医科大学教授

森本 岩太郎

### 1. はじめに

佐久市教育委員会からの委嘱により、同市大字塚原・常田にある藤塚古墳7号墳・8号墳の主体部から出土した7世紀末の古人骨につき、その概要を報告する。

### 2. 人骨の出土状態および所見

#### a) 7号墳主体部出土人骨(写真1)

7号墳主体部の石室から出土した人骨は、保存状態が不良で、骨片が散乱している。その多くは石室壁沿いに点在し、一部は石室の中央に散在する。複数個体の人骨片はいずれも成人骨片であるが、骨片相互の個体識別が困難であるために、人骨片の配列は解剖学的に不自然であるというよりほかはない。

以下、主要な人骨片について記述する。まず、頭蓋片については、後頭骨上半と左右の頭頂骨後半とからなる約13cm×13cm大の頭蓋冠片がある。その骨質は比較的薄く、外後頭隆起は小さい。矢状縫合およびラムダ縫合は、いずれも内板が閉じているが、外板は閉鎖がかなり進んでいることから、この頭蓋冠片は老年期女性のものであろうと思われる。この頭蓋冠片には左の側頭骨乳様突起片が伴っているが、保存が良くないので、この乳様突起片と上記の頭蓋冠片とを接合することは出来ない。これと別個体の頭蓋冠片がもう1つある。左右の頭頂骨前上部と前頭鱗の正中上部とが矢状および冠状縫合により連結した約11×9cm大の破片で、プレグマ部を含む。その骨質は比較的厚く、矢状および冠状縫合とも内板は完全に閉鎖し、矢状縫合の外板が部分的に閉じている。おそらく熟年期男性のものであろう。この頭蓋片にも左の側頭骨の外耳道と乳様突起の各一部を含む小片が伴うが、両者とも保存が良くないので、これらの骨片を相互に接合することは出来ない。

上肢骨片については、女性のもと思われる右肩甲骨棘片がある。下肢骨片では、まず左右不詳の小さな腸骨翼片がある。ほかに左右不詳の短い大腿骨体片が3個と脛骨体片1個とがあるが、いずれも性別不明である。

以上の所見を総合すると、7号墳主体部から発見された人骨片は、少なくとも熟年期男性1体・

老年期女性1体、合計2個体分となる。

#### b) 8号墳主体部出土人骨(写真2)

8号墳主体部の場合も、7号墳と同様に、保存不良の成人骨片が散乱している。ただし8号墳では、小さな人骨片が、壁際だけに偏在せず、中央部にも均分に散在している。

以下、主要な人骨片につき記載する。頭蓋片については、まず小さな頭蓋冠片が3個あるが、それらの所属部位は不明である。次に性別不詳の左の下顎枝上部片と右の下顎体片とがある。この下顎体片には歯は付いていない。歯については全部で3個体分(A~C)と思われる9本が残っているが、すべて遊離の永久歯である。Aの歯は右上顎犬歯1本で、その咬耗度はBroca2度であり、性別不詳の熟年期の個体に属する。Bの歯は右上顎の第1小臼歯・第1大白歯の2本と、左下顎の第1~3大白歯の3本で、それらの咬耗度はBroca1度であり、性別不詳の壮年期の個体に属すると思われる。Cの歯は左下顎第1~3大白歯の3本で、そのうち第3大白歯は萌出の途中にある。第1~2大白歯の咬耗度はBroca1度であり、性別不詳の壮年期前半の個体に属する。第1大白歯の歯冠は齶蝕(虫歯)のために、その遠心4/5の上半部が崩壊消滅し、歯冠の内部が大きくえぐられている。

椎骨については、胸椎体片1個と腰椎体の小破片が2個ある。

上肢骨については、左右不詳の手の指の比較的細い中節骨1個が認められる。おそらく女性の指骨であろう。

下肢骨については、左右不詳・性別不詳の腸骨翼の破片が1個ある。大腿骨体片は長短合わせて11個ある。最長の破片は約12cmあるが、土圧などによって押し潰されたかのように圧平されている。その他は10cm以下の短い破片である。脛骨体片は2個ある。長さが約14cmの右の脛骨の後面部分と、長さが約13cmの左右不明の脛骨体前縁部分とである。左右不詳の腓骨体片も1個ある。足骨では、右の踵骨隆起内側突起部の破片、左右不明の中足骨体の破片が各1個と、男性のものと思われる左の立方骨がある。以上の下肢骨片はいずれも個体識別が難しく、左の立方骨を例外として、性別などは分からない。

以上の所見を総合すると、8号墳主体部から発見された人骨片は、主として歯の所見に基づいて少なくとも成人3個体分であると思われる。その内訳は熟年期1体・壮年期2体、計3個体でそのうちの1体は男性・1体は女性であるが、残る1体の性別は不詳である。

これらの人骨のほかに、複数個体のイヌの骨格が人骨とは離れて1箇所に比較的まとまって発見された。

### 3. まとめ

佐久市所在の藤塚古墳出土の7世紀末の人骨片について記載した。7号墳主体部からは少なくとも熟年期男性1体・老年期女性1体、計2個体分が出土した。8号墳主体部からは少なくとも熟年期1体・壮年期2体、計3個体分の人骨片が確認されたが、そのうちの1体は男性、1体は女性である。8号墳の壮年期1個体の左下顎第1大臼歯に齶蝕が認められた。8号墳には複数個体のイヌの骨格もあった。





写真1 墓塚7号墳主体部出土土主人骨片

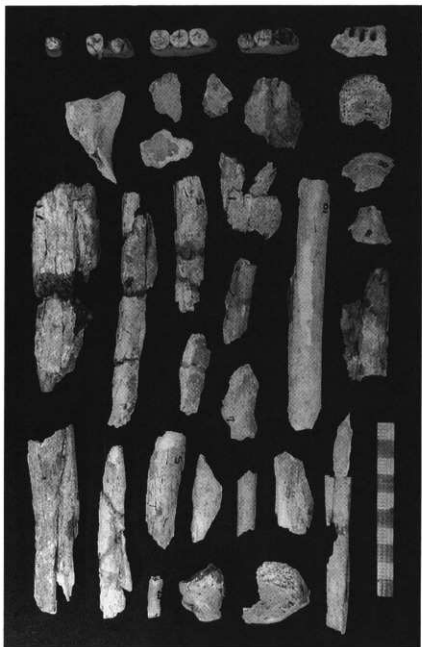


写真2 藤塚8号墳主体部出土主要人骨片

## 付編 2 長野県佐久市藤塚古墳群出土の人骨

群馬県立大間ヶ高等学校教諭

宮崎重雄

### I. 第2号特殊遺構出土人骨

出土したのは左大腿骨、左寛骨、仙骨、肋骨の4片である。

大座骨切痕の開きは小さく、大腿骨の骨端癒合が完全に終了していることなどから、成人男性のものである。出土状況は、屈葬であった可能性を示している。

左大腿骨は、保存最大長が290mmで、近位骨端・骨体近位部を欠き、遠位骨端部の前側を大きく破損する。粗線・外側唇・内側唇の発達が良い。左寛骨は保存最大長が117mmで、寛骨臼を中心に腸骨体・腸骨翼の耳状面の一部が残存する。弓状線の発達は明瞭で、寛骨臼の横径は63.9mmである。仙骨は、第一仙椎の椎体部とその周辺部が残存したものである。肋骨は保存全長93mmで、1片のみ残存する。

この個体の、他の部位が出土しない理由については不明である。

大腿骨計測値

計測番号	計測部位	計測値
	保存全長	290.0
7	骨体中央矢状径	30.6
8	骨体中央横径	98.0
21b	顆間窩幅	24.8
23	外側顆最大長	56.3
25	外側顆後高	36.6
26(3a)	膝蓋面直高	27.8

仙骨計測値

計測番号	計測部位	計測値
	保存全長	83.0
17	仙骨管上口横径	31.0
18	仙骨底上面矢状径	22.4+
19	仙骨底椎体上面横径	56.0e

寛骨計測値

計測部位	計測値
保存全長	117.0
寛骨臼最大横径	69.3

人骨の計測法は、馬場(1991)による。単位：mm

## II. 8号墳主体部礎床下出土の人歯・骨

8号墳主体部礎床下から人歯2本と部位不明の細骨片が出土した。これらの人歯・骨は出土地点などからこの古墳の被葬者のものと思われる。

右上顎臼歯は、舌側面窩が大きく深く凹み、典型的なショベル型を呈する。舌側面窩には舌面隆線が、その両側に舌面溝が明瞭に発達している。舌面歯頸裂溝は認められず、唇面隆線、唇面溝は不明瞭である。切縁の全体に咬耗による象牙質が露出している。咬耗の様子は鉗子咬合を窺わせる。遠心歯頸部に齧蝕を疑わせる浅い窩がある。

右下顎犬歯は、中央舌面隆線が舌面歯頸隆線と結合し、他に近心側にもう1本舌面隆線がある。これら2本の舌面隆線に挟まれて3本の舌面溝がある。舌面歯頸隆線はごく弱く発達し、舌面歯頸溝は観察されない。咬耗によって尖頭部に紡錘状をした象牙質が露出している。尖頭の近心・遠心両切縁にも咬耗がおよび、遠心側にわずかの象牙質の露出がある。近心・遠心両歯頸部に齧蝕と思われる浅い凹みがある。

歯の大きさ、咬耗度から被葬者は、熟年の男性と推定される。

歯の計測値

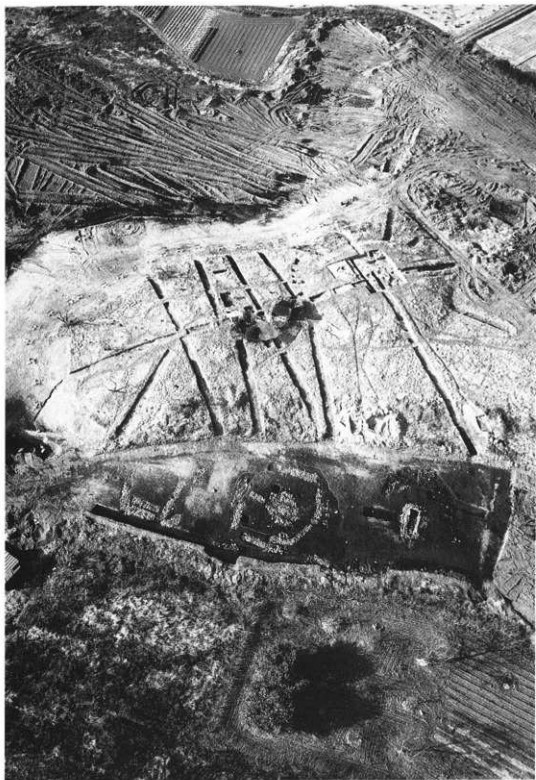
	全 長	近遠心径	唇舌径	歯冠長
右上顎中切歯	22.6	8.7	6.9	11.6
右下顎犬歯	29.5	7.2	7.3	12.7

計測法は藤田(1949)による。

単位：mm

### 引用参考文献

- 馬場悠男(1991)「人骨計測法」『江藤盛治・人類学講座一別巻』雄山閣、東京
- 藤田恒太郎(1949)「歯の計測基準について」『人類学雑誌』61, 27-32.
- 上条雍彦(1979)「日本人永久歯の解剖学」アナトーム社、東京
- 片山一造(1990)「古人骨は語る」同朋社、京都
- Matsumura, Y. (1990). Geographical variation dental characteristic in the Japanese of the protohistoric Kofun period. *Journal of the anthropological society of Nippon*, 98(4), 439-450.
- Nahakashi, T. and Nagai, M. (1986). Sex assesment of fragmentary skeletal remains *Journal of the anthropological society of Nippon*, 94(3), 289-305.
- 栃原博(1957)「日本人の歯牙の咬耗に関する研究」『熊本医学会』31. 補冊、4, 1-27.



藤塚古墳群・藤塚遺跡Ⅱ全景（協同測量社 撮影）



1. 遺跡の近景 (南東より)



2. 遺跡の近景 (南西より)



1. 藤塚4号墳 (北東より)



2. 藤塚4号墳 (北西より)



1. 森塚4号墳（北より）



2. 森塚4号墳（南より）





1. 藤塚4号墳円墳断面（北より）



2. 藤塚4号墳円墳断面（南より）



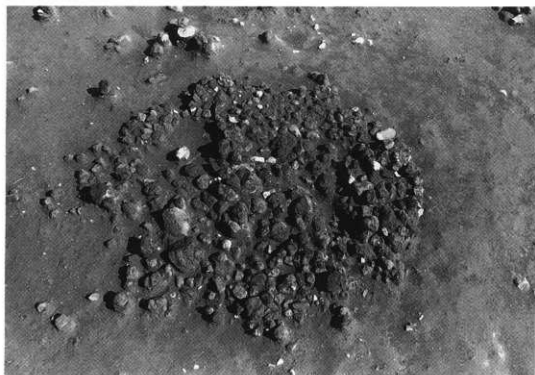
1. 墓棺1 (南より)



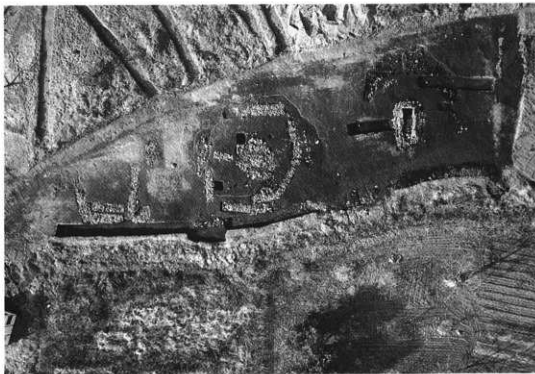
2. 集石1 (南より)



1. 集石2 (北より)



2. 集石2 (南西より)



1. E区全景



2. 7号墳



1. 7号墳石室 (南より)



2. 7号墳石室 (南より)



1. 7号墳石室（西より）



2. 7号墳石室（東より）



1. 7号墳遺物出土状態（南より）



2. 7号墳遺物出土状態（東より）



1. 8号墳



2. 8号墳 (西より)





1. 8号墳 (東より)



2. 8号墳主体部 (南より)



1. 8号墳主体部（北より）



2. 8号墳主体部掘り方（南より）



1. 9号墳 (西より)



2. 9号墳 (西より)



1. 2号墳 (南より)



2. 2号墳 (西より)



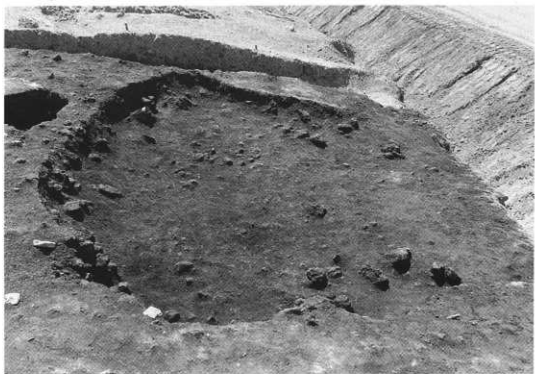
1. 第1号住居址 (南より)



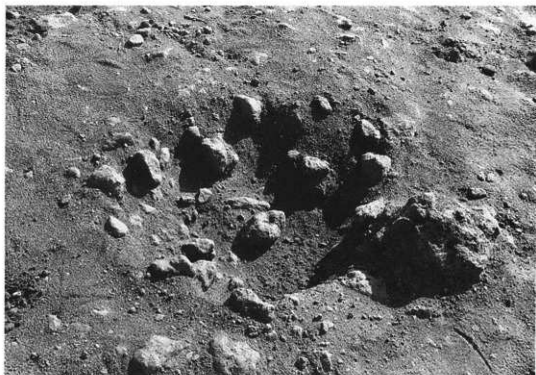
2. 第1号住居址 (北より)



1. 第1号住居址遺物出土状態（北より）



2. 第2号住居址（北より）



1. 第2号住居址炉址（西より）



2. 第3号住居址（北より）